

岩国の幕末史を紹介

歴史3館巡りいかが...

吉川経幹展などで貴重資料公開

吉田松陰の妹「文」を主人公に幕末を描くNHK大河ドラマ「花燃ゆ」の放送開始に合わせ、幕末に奮闘した岩国藩の歴史を紹介する特別展が横山の吉川史料館、徴古館、岩国美術館で始まりました。同じ長州でも、幕末における岩国藩は旧藩主・吉川氏の下で独自の取り組みによって本藩・長州藩の毛利氏を助けています。岩国の幕末史を知る貴重な展示内容です。皆さんも一度、3館を巡り歩いてみませんか。



吉川史料館は朝廷や長州藩のために周旋に努めた吉川経幹(きつかわ つねまさ)公の業績を紹介する「吉川経幹展」を行っています。期間は3月15日まで。幕末の長州藩外交を託された経幹(1829〜69年)と長州藩主毛利敬親(もりり・たかちか)公との関係、経幹公が京都で携わった政治、第1次長州征伐を回避した働きなどを詳細に知ることができる一級史料37点を紹介しています。

史料館の原田史子学芸員は「幕末混乱期に経幹公が果たした役割は大変重要なものでした。ドラマ第1次長州征伐回避のため岩国を訪れた西郷隆盛が記した書状

マに描かれていない史実を紹介することで幕末の岩国の歴史を市民に知っていただきたい」と話しています。まず注目は敬親公から贈られた花押入り茶器です。安政3年(1856年)経幹公が敬親に招かれ、萩にある藩主別邸の「花江亭」で接待を受けた際に受け取った逸品です。嘉永6年(1853年)6月3日にペリーが黒船で来航、国内情勢が大きく揺れる中、敬親公が毛利氏一族の結束を図るため、疎遠となっていた吉川氏との親交の証として贈ったとされています。蓋の裏に敬親公の花押が、金で描かれ、優美な時絵画も施されています。

幕末の政局と岩国藩の関わりは経幹公が編年体でまとめた「吉川経幹周旋記」に詳細に記されています。幕末に長州藩は京都で政治的影響力を拡大していました。孝明天皇の指示で長州藩は攘夷派の先頭に立ちます。長州藩は京都警護の一翼を担い、経幹公は経親・元徳公父子の名代として警備に当たります。二条城では將軍・徳川

家茂にも謁見しています。攘夷派公家の支援で天皇の大和行幸が決まりますが、会津、薩摩藩を中心とする公武合体派が攘夷急進派を排除し、長州藩は参朝停止処分、堺町御門護衛も解任されるなど立場は一変、経幹公は公家七卿ら約200人と共に長州に向い、都落ちするのです。その後、長州藩は四国連合艦隊の攻撃を受け、下関は焼け野原、経幹公は幕府との戦いになれば、藩は壊滅すると危惧して戦闘回避に奮闘します。幕府軍総参謀だった西郷隆盛は岩国を直接訪ねて経幹公と交渉し、3家老に責任を取らせて事態を収めることを提案し、経幹公の周旋で第1次長州征伐は回避されたのでした。



隆盛の書状や経幹公の覚書、第1次長州征伐を命じた「征長令」など、幕末を物語る史料を見ることができます。政局が大きく変動する京都で奮闘しながらも経幹公は岩国に残した奥方への優しい気配りを忘れず、心温まる手紙を送っています。これも見どころです。徴古館では幕末に国を憂い、精力的に活動した藩士で儒学者(陽明学)の東沢瀉(ひがし・たくし)が描かれた「精義第一」の隊旗

沢瀉、天山が結成した「精義第一」の隊旗

内の民家で偶然発見され、その後同美術館が購入したものです。京都市にある霊山歴史館の木村幸比古学芸課長が「松陰の直筆に間違いはない。松陰全集にも収録されていない貴重な資料」と高く評価しているもので、発見以来、一般公開は今回が初めてです。手紙は浦賀に来航した黒船を見ようと江戸を訪れた松陰が嘉永6年(1853)の夏ごろ、江戸で流行していた狂歌や見聞きした情報を縦約20枚、横約70枚の和紙に簡条書きで記して故郷の身内や同志に送ったものです。その冒頭、「安倍川(あべかわ)餅 評判程ノ味毛無(し) 上喜撰(じょうきせん) 二八落夕御茶菓子」の狂歌が書かれています。歌の「安倍川餅」とは静岡名物の和菓子「安倍川もち」を開国を決めた当時の老中・阿部正弘にかけたもの。「上喜撰」とは高級銘茶のことで、ペリー艦隊の蒸気船にかけたもの。阿部老中は幕閣の中でも優れた人物と評判の良かった政治家ですが、ペリー艦隊来航の前に何もできなかったことを皮肉るものでした。

さらに江戸で流行っていた「アメリカがのませにきたる上喜撰 たった四杯で夜もねむられず」と4隻の黒船外交がいかに幕府や庶民に大きな衝撃を与えたかを風刺した狂歌6首も書かれ、後に黒船密航を企てることになる松陰が黒船に強い関心を持っていたことがうかがえます。